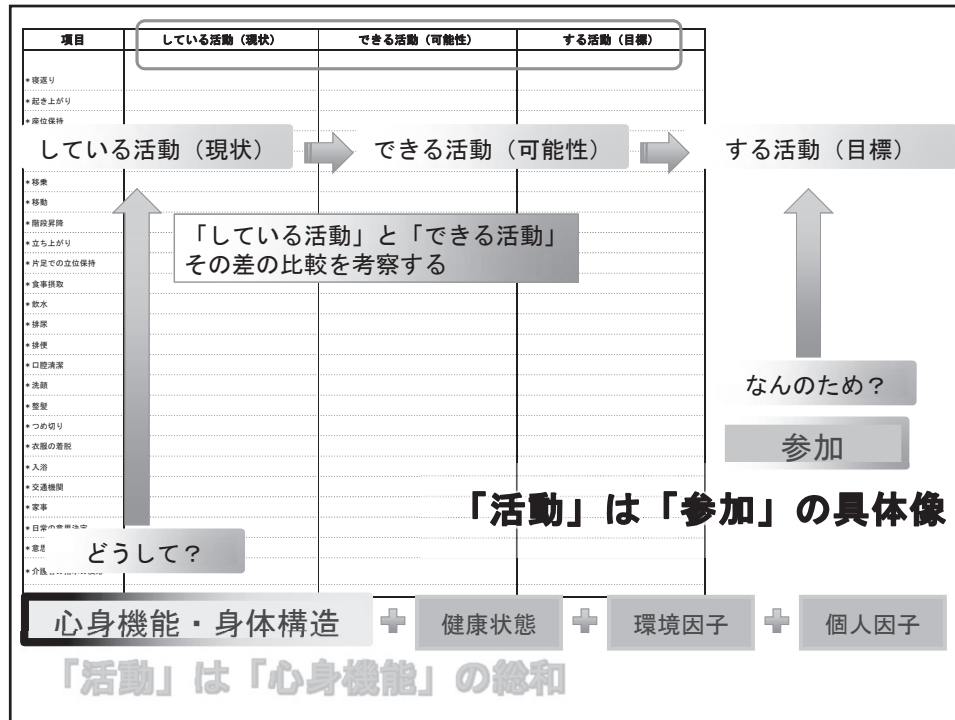
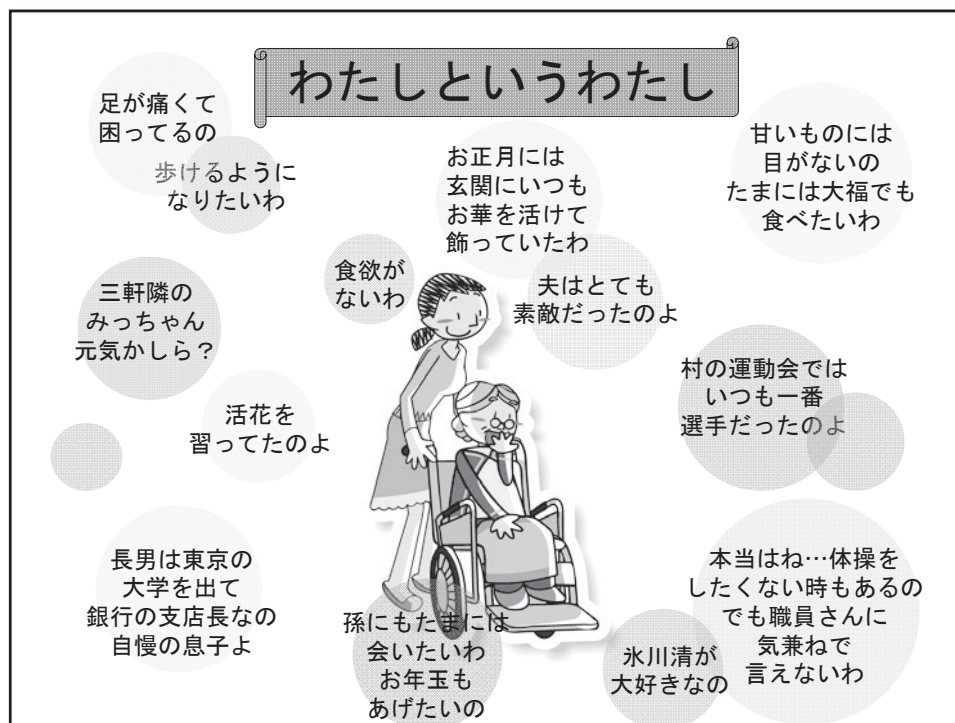




「している活動」の意義

- ① 「参加」の具体像
- ② 自立度は人間としての尊厳に影響する（遠慮・依存・干渉）
- ③ 「活動」が「心身機能」へ影響する
- ④ 生活の一部として行っていることが同時に、頻回に行う訓練としての効果を持つ
- ⑤ 「生活不活発病」と「生活機能低下の悪循環」の予防・改善の効果を持つ
- ⑥ 「している活動」のやり方を本人と一緒に決めていく事は、自己決定権の発揮の機会を増し、自己決定能力向上となる
- ⑦ 目標を達成するための大事なステップ

「よくする介護」を実践するための ICF の理解と活用 P50



専門職としての バラエティーを増やす

- 1) 介護技術の基本の習得
- 2) 分析能力向上
- 3) 介護技術の応用力向上
- 4) 環境因子（福祉用具）の知識
- 5) 十把一絡げ （じっぱひとからげ） 介護からの脱却
- 6) よくする介護へ





「よくする介護」の基本的な考え方

- ① よくする介護の対象は「生活機能低下（障害）のある人」とその人の生活・人生全体
- ② よくするのは現時点だけではなく、将来を考えて：目標設定が重要
- ③ よくする観点から「している活動」に働きかける
- ④ よくする専門的技術でプラスを引き出すこと（潜在的生活機能の発見開発）
- ⑤ よくするには「生活不活発」・「生活機能低下の悪循環」の予防改善を重視
- ⑥ 真のチームワークとして働きかける
- ⑦ 利用者・家族との「インフォームド・コオペレーション」（情報共有に立った協力関係）が前提：自己決定権の尊重、尊厳の重視

「よくする介護」を実践するための ICF の理解と活用 P70～71

介護福祉士は臨床の省察家

- 実践しながら情報収集ができる。
- 実践しながら分析ができる。
- 実践しながら日々の変化を発見できる。
- 実践しながら目標を共有できる。
- だから決めつけない関わりができる。

*** だからこそ情報の客観性が重要**

（誰もが理解できる＝インフォームド・コオペレーション）



介護現場のエピソード

Episode1：命が助かったらそこで役割は終了？！

研修担当医から歩く生活はあきらめろと『できない説明』を患者にするよう言われ苦悩した研修医…出来ないことを見つけ、出来ないことを説明するのではなく、可能性を見つけ、沢山のバラエティーを提供できるそんな視点。「限定的自立（参加制約）」状態ではあっても、そこから「普遍的自立」への可能性を当事者と共に考えていくことの必要性は？

Episode2：患者や利用者を人質にしない

当施設の前施設長（医師）の名言『患者や利用者を人質にしない。』『うちではこれしか出来ません。』『こういう方針です。』と本人の選択の幅（可能性）を限定しない。活動の「レパートリー（様々な活動の種類）」と「バラエティー（同じ活動項目の行い方の多種多様性）」が産まれなくなる。

Episode3：座れる事で片手があく。その片手に可能性発見

肺炎入院後、生活不活発、座れない、動けない、話せない状態で退院、リハビリ目的で入所した当事者。インフォームド・コオペレーションと環境促進因子へのアプローチで参加レベルと活動レベルが即日改善。趣味の囲碁と小言の復活へ。

介護現場のエピソード

Episode4：これがインフォームド・コオペレーション？

心不全と声帯麻痺気管切開状態等で介護度5、老衰状態の当事者。在宅に向け「いつ死ぬかわかりませんか？」と繰り返し説明する医師と「緊張伸展が強くて車椅子に座れないので通所サービスは無理です。」というセラピスト。在宅他職種協働、環境促進因子工夫で参加レベルの向上が！

Episode5：運転がしたい当事者とそれを支える担当医

運転がしたい脳出血右片麻痺の当事者。それを否定せず、可能性を検討する担当者会議。自分のしたいことを専門職が共に考えてくれる。そのチーム環境促進因子が妻との喫茶店デートや家族外食を実現、活動レベルの歩行も四点杖の工夫から階段とスロープ歩行を目的に一本杖歩行までに。

Episode6：介護度が高いとICFは使えない？

介護度5（脊椎損傷・パーキンソン病・四肢麻痺）の当事者。母としての参加レベルの目標から活動レベルの目標に。移乗方法の介護バラエティーと環境因子の工夫、抗重力筋へのアプローチで笑顔のある家族への復帰。



介護現場のエピソード

Episode7：している活動の専門家

身体抑制を受けていた当事者。当施設入所後他職種協働で活動レベルの向上（食事と排泄のバラエティー）、「生活機能低下の悪循環」の予防と改善へ。

Episode8：人間に戻れた！～自立度は人間の尊厳を守る～

きっかけは尿留置カテーテルの抜去。生活の一部として行ったポータブルトイレ排泄が同時に、頻回におこなう訓練としての効果へ。トイレへそしてカラオケへ。その行動継続が生活意欲の継続、参加レベルの向上へ。

Episode9：自発的行動には納得と自己決定が必要

意欲がない？！参加レベルの目標から活動レベルの目標に。階段昇降りハビリ、そして喫茶店接客経営参画、充実した生き甲斐へ。

他職種協働

～真のチームワークに向けて～



求められる介護福祉士像

「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会」報告書（2006年7月5日）より

[これからの介護福祉士の人材養成における目標]

- ①尊厳を支えるケアの実践
- ②現場で必要とされる実践的能力
- ③自立支援を重視し、これからの介護ニーズ、政策にも対応できる
- ④施設・地域（在宅）を通じた汎用性ある能力
- ⑤心理的・社会的支援の重視
- ⑥予防からリハビリテーション、看取りまで、利用者の状態の変化に対応できる
- ⑦他職種協働によるチームケア（他職種協働のスキル）
- ⑧一人でも基本的な対応ができる
- ⑨「個別ケア」の実践
- ⑩利用者・家族、チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力
- ⑪関連領域の基本的な理解
- ⑫高い倫理性の保持

ICFの活用と実用化に向けて

各専門職が自己の専門性を自己覚知する

医療から介護への連携で同じ絵を見る

（命の継続から生活の継続へ）

ICFの現場それぞれ種類に応じた役割分担それを支える制度改革

ICFの活用のための課題と対策の明確化

他職種間でのICF良質のエピソード体験の共有と好循環を